

近代の正義論 I

加藤 英一

1. はじめに
2. 問題の所在
3. 研究目的
4. 研究手法
5. 先行研究
6. デカルトの近代思想
7. ホッブスの社会契約説と正義
8. スピノザの理神論と正義
9. ライプニッツのモノダ論と正義
10. 近代初期の正義論
11. おわりに

概要

本稿では初期近代の正義論を取り上げている。近代哲学思想の特徴は人間の理性を用いて真理を探究する姿勢にあり、信仰によって真理を求めた中世のものとは異なる。正義を巡る議論も、このような新たな姿勢の下で展開されることになった。

初期近代の思想を代表する者としてデカルト、ホッ布斯、スピノザ、ライプニッツを取り上げ、各々の正義論を比較検討した。デカルトは近代西欧合理主義の立場を確立した。ホッ布斯は社会契約説の立場から、第3の自然法である信約の履行として正義を示した。スピノザは理神論の立場から、その法的効力を認めたものの、正義は単に外在的なものに過ぎず、人間精神の本性に属するものではないとした。ライプニッツは彼のモノダ論を下に正義について語っている。それによると正義は、聖書の黄金律と同様とされる。但し彼の場合、正義は神への敬愛による人間の幸福としての慈愛であると表現されており、これは理性に基づいて解明された知恵に依存する他者への善意を含む公共的なものとされた。

このように初期近代には様々な哲学思想が生まれたが、ここで正義を巡る議論に関して以下の3つの点をその共通点として挙げることができる。①近代西欧合理主義の立場として、人の理性による真理の探究という哲学思想の下、個人の自律性をその前提とした社会を想定した上で正義が議論されている。②個人の自律から社会秩序が問題として認識され、正義はこの秩序問題との関係から議論されている。③神との関係から正義の特徴として永久性や無限定性、独立性、第1原因、そして完全性が挙げられている。

キーワード：正義、理性、社会契約説、理神論、モナド論

1. はじめに

ここにひとつの思考問題がある。「ある疫病が流行りマスクが不足しています。AさんはBさんから定価でマスクをすべて買い取りました。その後、Aさんはマスクを欲しが多くの人々に定価の2倍の価格で販売しました。尚、マスクを買った多くの人々は、そのマスクが定価の2倍であることを知ったうえで喜んで購入しています。①BさんはAさんにマスクを全部売ることができて喜んでいます。②多くの人々もマスクが手に入って喜んでいます。③Aさんはマスクで儲けることができて喜んでいます。④Aさんは違法な行為はしておらず、自由にマスクを購入販売しています」¹⁾ というものである。

ここでAさんは違法行為を行っていない。しかも誰も不満を抱いていない。むしろ満足しているのである。しかし何かもやもやとしてすっきりとしないものが残る。Aさんの行った行為は、正しいのだろうか。それとも正しくないのだろうか。正と不正、即ち正義と法は一致するとは限らないということなのであろうか。

2. 問題の所在

正義は社会における秩序、換言すると人々の間の対立を避け平和をもたらす機能を有するはずである。ところが国家間または人々の間に対立が生じた場合、人は正義の名の下に争いをはじめめる。平和をもたらすはずの正義が、人々が争う根拠となってしまふ。正義が孕む矛盾といえる。それでも古代から現代にまで正義を巡る議論が絶えることはない。

正義を巡る議論、即ち正義論は時代や場所の相違により、変化を遂げながら様々な形を成してきた。しかしそれらは互いに全く異なるものへと変化するのではなく、先行するものを批判や修正を行うと共に受け継ぐことで、相異なる側面と共通する側面の両方を結果として含むことになる。そこで正義を巡る議論の歴史的な変遷を追うことで、異なった側面を理解すると共に通時的に「共通する価値観」というものも見出すことができるのではないか、というのが本稿の問題意識である。

3. 研究目的

本稿では近代初期の正義論を取り上げる。西欧中世のスコラ哲学ではキリスト教からの強い影響を受け、正義論も神との関係がその中核を占めていた。それに対して西欧近代の哲学思想では、議論における全ての前提を神に求めるのではなく、根本からものごとを批判的に考え直すといった、人間の理性を用いて真理を探究する姿勢が生まれた。また社会

は人々の間での契約によるものとされる社会契約説も近代の哲学思想の特徴である。そこで正義を巡る議論も、このような思想的な影響を受けたものへと変遷することになった。今回はこの初期の近代哲学思想における正義論を取り上げる。

本稿は拙者がこれまで進めてきた研究の目的と同様、拙者自身が「正義とは何か」を問うという姿勢は意図的に避けることにする。歴史過程の中で、正義という概念が如何に語られてきたのかを明らかにすることが最も重要であると考えからである。そこで特定の正義論に対して、その善悪や有益性、影響力などを議論し判断することは避ける。あくまで正義を巡る歴史的な議論の中で、その流れや変化と共に共通した部分を見出すことが本稿の研究目的なのである。

4. 研究手法

これまで拙者が進めてきた研究からも明らかなように、正義を巡る議論は時代や場所によって相異なる側面もあれば共通する側面もある。本稿でもこれまでと同様に、正義に纏わる諸理論を歴史的経緯からその内容を比較分析して、そこでの相異点と共通点とを明らかにしていくという研究の方法を採用する。

正義論を時系列的に分析することにより、正義を巡る議論の流れを把握すると共に、正義に対する変化の側面と共に共通している側面とを区別することが可能となる。この方法によって、正義を巡る議論の本質がより明確になる。

本研究における時代区分は、古代－中世－近代－現代という一般的な枠組みを用いている。これまでに古代として古代ギリシャ時代、ヘレニズム時代、古代ローマ時代の正義論、そして中世の正義論を扱ってきた。そこで本稿では、次の近代を取り上げる。但し近代哲学思想は、広大で膨大な範囲となる。それ故、紙幅の都合からも全てを一度に扱うことは不可能と考える。そこで今回は、近代哲学思想の中でも比較的初期の正義を巡る哲学思想家を取り上げる。

具体的には、デカルト (René Descartes) とホッブス (Thomas Hobbes)、スピノザ (Baruch De Spinoza)、そしてライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz) を取り上げる。彼らの哲学思想に触れながら、そこにおいて如何に正義が語れているのかをみていく。ここから近代初期の正義を巡る議論の相異点と共通点とを明らかにすると共に、その特徴を明らかにしていく。

5. 先行研究

本研究に先行するものとして、ここでは拙者がこれまでに行ってきた古代および中世の正義論に関する研究を挙げておく (加藤,2022,2023,2024a,2024b)。特に古代における正義

に関する研究は、古代ギリシャとヘレニズム、そして古代ローマの3つに区分している。

正義を巡る議論が形而上学的に展開されることになったのは、ソクラテス（Socrates）、（プラトン）Plato、アリストテレス（Aristotelēs）以降である。プラトンやアリストテレスは、正義を巡る議論をポリスとの関係から捉え、そこから正義論が公共性や社会性を孕んだものとして展開された。ここからは一種の社会秩序としての正義が導かれることになった。特にここでの社会秩序とは、生得的な魂や徳の差異による社会階層を示している。またこの社会秩序としての正義の特徴として、永久性や無限定性、不滅性、独立性、そして完全性を挙げることができる。

続くヘレニズム時代にはエピクロス派とストア派、そして懐疑学派をその代表として挙げることができる。

エピクロス派は帰納主義的方法論の立場をとり、それが故にその学問的基盤を原子論に求めた。それに対してストア派は、理性の存在を前提とした演繹主義的方法論の立場をとった。またこの両学派によれば、人は自然を正確に知覚することができるとしているのに対して、懐疑学派はその可能性を否定した。

このように3つの学派の立場は異なるものの、ヘレニズム時代の哲学として共通する点も存在する。人の魂や倫理までを含めた自然という概念がそれである。3つの学派は共にこの自然を物理的存在として捉えている。

そしてこの自然との調和が、人における幸福とされる。但しここでの幸福は、古代ギリシャの哲学で語られたようにポリスと結び付けられることはなく、あくまでひとり一人をその対象としている。これがヘレニズム文化の特徴の一つであるコスモポリタニズムからの影響である。

このようなヘレニズム時代の哲学における正義論では、人々の幸福が自然との調和にあり、正義はそれに達するひとつの手段であるとされた。

古代ローマ時代の正義論では、ストア派を背景とした思想とキリスト教を背景とした思想との2つの流れを見ることができる。ストア派をその背景とした思想では、各人の価値に従った配分を正義と捉え、それがローマの国家としての秩序の維持に結びつくと考えた。これは既存の古代ローマの階級社会を正当化するものであり、現世的な思想といえる。またこの正義の正当性は、自然に求められたが、自然とは善を意味するものであり、古代ローマの宗教もこの思想を支えるものとして機能した。

他方、キリスト教をその背景とした思想では、神との関係が最も重視され、その思想は来世的なものである。正義に関しても、それは神との関係における秩序がその対象とされた。神は全ての被造物に対し、その価値に合った配分を通じて各々に秩序を与えた。ここでの秩序の範囲は国家に限られることなく、広く人類とされた。またこの秩序とは、人々の間における平和を示している。そこで正義とは神が人々に与えた秩序、そして平和ということになる。

ストア派を背景とした現世的な思想とキリスト教を背景とした来世的な思想との間には、正義に関してこのような相異を見出すことができるものの、そこには共通点も見られる。正義は善であり、そのものの価値に則した分配による秩序であるとする点が、両思想の共通点である。

続く西欧中世ではキリスト教思想を中核とした、スコラ哲学が大きな影響力を有していた。正義を巡る議論も、この影響を強く受けることになった。ここでは主にアンセルムス(Anselmus Cantuariensis)とトマス・アクィナス(Thomas Aquinas)を取り上げた。

アンセルムスにとって、正義は神そのものとされる。そこで正義は理性を通じて神が人の意志に意志するように意志するものとされる。正義は神から授かるものである。

このように正義は神であるということから、神の特徴はそのまま正義の特徴と結びつけられる。それが上位性・最大性、唯一性、原初性、永遠性、完全性である。

またトマス・アクィナスは正義を徳のひとつととらえる。彼は正義を一般的正義と特殊な正義とに分ける。前者は人々を共通善へと秩序付ける役割を担い、後者は人々を他者の善へと直接的な方法で秩序付ける役割を担っている。

但し、トマス・アクィナスの正義論は、これだけに留まるものではない。彼はそれ以外に神と人との関係における正義についても触れている。むしろトマス・アクィナスの正義論の核心は、この神との関係における正義である。ここでは「原罪」故に神への信仰、そして愛という功德に対する返報が正義とされている。

このようにアンセルムスとトマス・アクィナスの正義を巡る議論には相異が存在する。それでも両者は、共に正義を神との関係から捉えていた点では共通している。ここにスコラ哲学の特徴が現れている。

6. デカルトの近代思想

近代の哲学思想を語るに際してデカルトの名前を外すことはできない。西欧中世におけるスコラ哲学では、真理の獲得は神への信仰に求められていた。それに対してデカルトは、人間の理性を用いて真理を探究するという姿勢をとることをもって、「近代哲学の祖」と呼ばれることになった²⁾。

デカルトによれば疑わしいものは虚偽であるとされる(Descartes,1637=1953,pp.44)。まずは全てのものを疑う姿勢からその哲学思想が始まる。我々の経験、即ち感覚による知覚は不確かなものであるとされる。そこで理性による認識の必要性が説かれる(Descartes,1637=1953,pp.53)。ここで理性とは、人間と他の動物を分ける証(Descartes,1637=1953,pp.13)であり、全ての人間に備わっているとされる。そして唯一の真理を探究することができるのが、この理性である。この一連の流れの帰結として生まれたのが有名な「われ思う、故にわれあり(cogito ergo sum)」(Descartes,1637=1953,

pp.45) である。無批判的に神を前提とせず、理性によって根本からものごとを批判的に考え直すという、近代思想の基盤がここに提示されたのである。正義を巡る議論も、主にこのような新たに近代的な哲学思想を下に展開されていくことになる。

7. ホッブスの社会契約説と正義

それまでの中世における思想とは異なった近代思想を基盤に社会思想を展開したのが、デカルトと同じ時代に活躍したホッブスである。ホッブスは、それまでの宗教や迷信から自由な立場をとった、社会に関する理論の最初の近代的な著述家といえる(Russell,1946=1970,pp.550)。社会に関する理論では、人々の間の関係や人と社会との関係、そして人と神との関係において、正義に纏わる議論が展開されることになった。

まずホッブスにおける人間観は、アリストテレス哲学をその背景としたストア哲学的人間観とは異なることに気づく(平石,1989,pp.75)。ストア哲学的なそれでは、人はそれ自体の内にその固有の生成や変化の原因を生得的に有しているとされ、そこから全体として自然的な世界秩序が形成されると見做される。ここにおいて人の目的は、自己に内在する形相とその本質的在り方の実現こそが善とされる。具体的には、自らの生得的な能力を発揮して、ポリスに貢献することが人の幸福であり、それがポリスの正義でもあるとされる。その際、自らの能力に適した役割のみを行い、他の役割には手を出してはいけないとされる。この点から人はポリスの動物といわれる。

一方、ホッブスは、人の内にあらかじめ生得的に設定されたものとしての国家や社会への志向を否定しており、国家は人々が自身が持つ目的のために信約に基づいて人為的に設立するものとしている³⁾。謂わば、個々の人々が全体としての社会や国家に先行するものと捉えられているのである。ホッブスの社会契約説は、このような人間観をその背景としているのである。

そこで国家が誕生する過程は以下のごとくとされる。自然の状態において、人々は生まれながらに平等であるが、この平等から他者に対する不信が生じる。そしてこの不信から戦争が生じることになる⁴⁾。「万人の万人に対する闘争」状態である。しかしこの戦争状態において、人間の生活は孤独で貧しく辛く残忍で短いものとなる。そこで「人々を平和に向かわせる諸情念」が、人々の間に生じることになる。死への恐怖、快適な生活に必要な物事に対する意欲、それらを勤労によって獲得する希望がそれであり、その実現のために人々をしてその理性は、協定へと導くのである(Hobbes, 1651=1954,pp.207-214)。理性は人を自然の状態から国家へと導く源といえる。

このように自然の状態からの脱出は自然的な在り方では不可能であり、人為的な取り決め、即ち社会契約が必要となる。但し、ここでは人々の自然権の自由の追求権が制限される。制限された権限は、主権者に譲渡されることになり国家が誕生するのである。これは

ホッブスの人間観として先述した、人々が自身が持つ目的、即ち安全としての平和のために信約に基づいて人為的に設立するのが国家であるとした点と一致する。また国家の目的は平和であり、正しさや公正ではない(平石,1989,pp.81)。人は究極的目的や善を求めて生きているわけではなく、あくまで自己の生命活動の維持や促進がその目的である(平石,1989,pp.78)。

これまでホッブスの人間観および自然の状態からの社会契約による国家の誕生に関して述べてきたが、それらを前提として正義がどのように捉えられているのか。ホッブスにとって正義は、自然の法の第3に該当する。それは「人々は、結ばれた信約を履行すべき」(Hobbes, 1651=1954,pp.236) というものである⁵⁾。ここから理解できることは、正義は国家の段階において初めてその意味を持つということである。自然の状態において履行すべき信約は存在することはなく、そこには正義が存在しない。理性から生じる人々の信約の履行は、平和をもたらし国家を成立させる。正義とは理性の法則であり、生命の破滅の禁止を意味するのである(Hobbes, 1651=1954,pp.241)。それとは反対に信約の不履行は、不正義となる(平石,1989,pp.73)。ここでは正義は自己の安全を確保するための手段でしかなく、その目的はあくまで人々の安全なのである⁶⁾(平石,1989,pp.83)。

ホッブスにとって自然の法という概念は正義に先行するものであり、ここでは「正義にかなった法とは如何なるものか」という問いは成立しない(平石,1989,pp.74)。ここにおいて正義には、道徳的および倫理的な意味が含まれることはない。正義とは信約の履行の遵守であり、それは人々の安全のための手段でしかないのである。

また人々が自ら制限された権限を主権者に譲渡するに際して、履行を強制するのに十分な権利と強力を持った共通の権力が設定されている必要があるとされる(Hobbes, 1651=1954,pp.226)。主権者の超越的権限の容認である。但し、主権者はあくまで自己の代理者であることから、「主権的権力を持つ人々が不公正をなすことはあっても、しかし本来の意味における不正義あるいは侵害をなすことはあり得ない」(Ⅲ 163) とされる(平石,1989,pp.83-84)。主権者はあくまで正義なのである。これが「リヴァイアサン」である。

8. スピノザの理神論と正義

スピノザは神の存在を啓示によらず合理的に説明しようとする理神論の立場をとっており、これは中世スコラ哲学への回帰とは明らかに異なった姿勢である。伝統に対するスピノザが抱く懐疑は、彼からユダヤ教とキリスト教からの決別を招くことになった(Yovel,1989=1998,pp.31)。スピノザにとって、神は自然の全体性と一体視される。それ故に神の掟は自然の理性の諸法則の中に示されているのであり、聖書の中ではないとされる(Yovel,1989=1998,pp.1)。ここにおいて神は自然であり宇宙であるとされることから、神の認識は自然の認識でもあるとされる(Yovel,1989=1998,pp.21)。

デカルトは実体として神と精神、物質の3つを挙げた。ここでは神が精神と物質を創造したが故に、神は精神と物質よりもより多くの実体性を持っているとされる。また精神と物質は各々思考と広がりという属性によって限定されるのに対して、神は無限とされる。それに対してスピノザにとっての実体は、デカルトと同様に神と精神、物質の3つであるとされ、精神と物質は有限であるために、自己充足性を有しないことから神とは区別される。ここで有限（＝限定を有する）はすべて否定と捉えられており、神の無限定性こそが唯一の完全に肯定的な存在とされる。また思考と広がりという属性は、デカルトと異なり精神と物質ではなく神の属性とされ、神は他の属性をも無限に有するとされる（Russell, 1946 = 1970, pp.564）。

スピノザによれば、全ては神により決められているとされる。神による予定調和である。それ故に全ては善とされる。ここでは全ては絶対的な必然性により支配されており、精神における自由意志や物質における偶然は存在しない（Russell, 1946 = 1970, pp.564）。

またスピノザにとって神は人間の愛の対象であるとされる。精神の最高善とは神についての知識であり、精神の最高の徳は神を知ることであるとされる。神に対する知的な愛は、思考と感情の合一であり、真理を把握した悦楽と真なる思考との結びつきなのである。そこで生起する事象に関する知識の増加は、出来事を神の観念に関連付けることであり、それは神の一部を理解することとなる。何故ならばあらゆるものは神の一部だからである（Russell, 1946 = 1970, pp.566-568）。

このように全ては神から生じるものであり、それ故に全てが善とされている。但しこれでは、あまりにも非現実的と思われるかもしれない。しかしスピノザは人々の不幸に関して、その存在を否定しているわけではない。彼によれば不幸は個々の人にとっての不幸であり、宇宙全体から見れば究極的な調和を高揚する一時的な不調和にすぎないとされる（Russell, 1946 = 1970, pp.572-573）。

スピノザの哲学思想では、このように神の完全性がその根底に存在している。ここにおいて正義が如何に議論されているのか。しかしすぐに「正義に見出しを掲げて秩序立てて論じた個所はスピノザにはない」という事実突き当たる（河井, 1989, pp.89）。但しスピノザにおいて正義論が全く欠けていたとは言えない。

スピノザが活躍する以前の16世紀のヨーロッパでは、宗教改革が生じると共に大航海時代の到来を迎えていた。新たな知識と既存の宗教との間に、数々の問題が社会問題として浮かび上がってきた。そこでこれらの諸問題に対して、スコラ哲学者達は議論を巡らせるようになったのである。その際正義は、法との関係で論じられることになったのである（大野, 2020, pp.236）。特に法と正義の源泉は、自由の内実を構成している人間相互の理性的な愛と結合とに求められることになった（河井, 1989, pp.104）。スピノザにおける正義論も、このような流れの中から生まれることになった。

スピノザの正義論に影響を与えたのは、トマス・アクィナスとホッブスである。まずス

スピノザの正義論の源のひとつは、正義を枢要徳の1つと捉えるトマス・アクィナスの求めることができる。スコラ哲学のサラマンカ学派やイエズス会士の多くがトマス・アキナス主義的であり、そこではウルピアヌス (Domitius Ulpianus) による「各人に彼のものを与えんとする恒常的意思」としての正義の定義がその基盤とされていた (大野,2020,pp.236-238)。スピノザの正義論の基盤もウルピアヌスのそれに求めることができる。

他方ホッブスからの影響は、自然法を巡る点にある。ホッブスの自然法には、自然法と自然科学との間の類似性や同一性を見て取ることができる。この点スピノザの自然法でも実定法も神の法も共に自然法と見做され、全ての法則や規則は理性によって導き出される自然法であるとされる。ここから学問における法則や規則の探究は、真理探究そのものであるとされた (大野,2020,pp.240-241)。

またスピノザは自然の状態に関しても、ホッブスから影響を受けている。但しホッブスにおいて国家は自然の状態から人為的に創られるものとされていたのに対して、スピノザにとって国家は自然の状態に対して外面的に関わる理性の原理に求められるのではなく、自然の状態から自然的に導出されるものとされた。これは自然の一部として捉えられている人間の本性を両面価値的に捉えていることから導かれるものである。即ち人間の共通の本性には、闘争としての悪い側面と相互扶助と協力としての神の側面という2つの相反する側面が含まれているとするものである (河井,1989,pp.92)。

スピノザにとって自然の状態では、全てのものが全ての人のものとされる (Spinoza, 1677=1951,pp.61)。それは自然の状態において、各人に各人のものを帰属させる意志はないことを意味する (河井,1989,pp.89)。それ故、自然の状態では正義・不正義は存在しないことになる⁷⁾ (Spinoza, 1677=1951,pp.61)。

スピノザもホッブスも社会を前提として正義を捉えている点では共通している。しかしホッブスが正義を人間精神の習慣と捉えているのに対して、スピノザにとって正義は人間精神の本性に属するものではないとされている (大野,2020,pp.250)。正義・不正義は外面的概念であり、精神の本性を説明する属性ではないとするのがスピノザの正義に対する姿勢である (Spinoza, 1677=1951,pp.61)。スピノザはウルピアヌスと同様な正義を述べながらも、スコラ哲学とは異なり、正義は外在的なものにすぎず、人間精神の本性に属するとは捉えられないものと見做したのである (大野,2020,pp.251)。

それではスピノザが正義を軽視しているのかといえばそういうわけではない。正義と神への愛は社会の権利関係において効力を持つことをスピノザは認めている。その究極的な形として、神の命令である正義と愛の実践が法的に効力を有している国を「神の国」と表現していることからそれは明らかである。

9. ライプニッツのモナド論と正義

モナド論はライプニッツを語る際には、避けては通れない概念である。モナドとは実体に対するライプニッツの考えを示している。前述のごとくデカルトは実体を神と精神、物質の3つに分け、神は精神と物質よりもより多くの実体性を持つことで他の2つとは異質のものであるとした。また精神と物質は、各々思考と広がりという属性によって限定されるのに対して、神は無限とされる。それに対してスピノザは、実体をデカルトと同じように神、精神、物質の3つに分けるが、精神と物質は有限であるために、自己充足性を有しない点から神と区別されるとしたのである。

ライプニッツはスピノザの概念に対して、有限・無限といった広がりの実体の属性ではないと批判する。ライプニッツは物質の実存性を否定し、それに対する魂を無限の集団と捉える。このような無限個数の実体がモナドである。モナドは全てを構成する最小の单子であり、魂である。「モナドは窓を持たない」と言われるが、それは单子間の相互作用がないことを意味している。但しその変化は認めており、单子の変化は予定調和的であるとされる⁸⁾ (Russell, 1946 = 1970, pp.576)。またモナドはものを構成する最小単位であることから、それ以上の分割は不可能であり、それ自身を能動的に統一する統一体なのである。モナドの特徴には、それ自身の内にあらゆる他のモナドを表出し、それによって世界全体を異なった仕方とパースペクティブから表出する点が挙げられ、これによって世界の多様性が説明される (酒井, 2021, pp.57)。

人体も諸モナドによって構成されており、個々のモナドは不死である⁹⁾。但し人の場合、1つの固有な魂が支配的モナドとして存在している (Russell, 1946 = 1970, pp.577)。そこで人はひとつのモナドとしてふるまうことになる (Leibniz, 1710 = 1990, pp.253)。また人はモナドとして他者や社会との結合において規定される。

ライプニッツはモナドという実体の概念に基づき彼の哲学思想を構築するのであるが、そこにおいて彼はホッブスの『市民論』や『リヴァイアサン』への疑問や批判を通じて自らの正義概念を展開していくことになった (酒井, 2021, pp.185)。ホッブスは自然の状態を「万人の万人に対する闘争」と見做したが、ライプニッツこれを否定する。自然の状態とは普遍的で不平等な共同体であり、構成員の一生と幸福を目指すものであると見做したのである (酒井, 2021, pp.12)。このライプニッツの自然の状態では、より小さな知性を与えられた人間がより大きな知性を与えられた人間の善悪の認識を理解し、権威を認め指示に従う秩序だった社会が想定されている¹⁰⁾ (酒井, 2021, pp.171)。

ライプニッツは、ホッブスの主意主義論に対しても批判を行っている。これは彼のモナド論の影響によるものであり、ひとつのモナドとして自律した主体的個人を前提とする彼の立場からによるものである (酒井, 2021, pp.2)。ホッブスの主意主義論では、神の正義は

神の意志にもとづくたとされるが、ライプニッツにおいては神の正義も知恵と善意の規則に従うものとされる(酒井,2021,pp.7)。善意の規則も正義の規則も永遠真理一般の規則もその本性によって存続するのであり、神の恣意的選択によるものではないとされる(Leibniz,1710=1990,pp.295)。またホッブスの主意主義論では、正義は権力者の恣意であるとされるのに対して、ライプニッツは正義は事物の本質にかかわる必然的であることから、永遠な真理に属するものとされる(酒井,2021,pp.117-118)。これにより権力者が必ずしも正義とは言えなくなる¹¹⁾(Leibniz,1710=1990,pp.25)。このような主意主義論の誤りは、法と法律を混同していることから生じたものとされる。法は不正たりえないのに対して、法律は権力が制定し維持するものだからである(酒井,2021,pp.119)。

ライプニッツにとって社会は、人々が争いを避け、妥協を求める性向を有しているとされる。この社会は神により創造された被造物としての世界であり、神に相対する被造物一般の秩序を示すものである。それ故、社会は闘争と自己保存とを同時に含意するが、そこは道徳的行為の実践の場でもある(酒井,2021,pp.13-14)。ここでの善は共通善を意味しており、これが人々の自己の根底において各々のアイデンティティを形成するのである¹²⁾(酒井,2021,pp.96)。

ライプニッツは社会を神によって創造された被造物と捉えているが、その際彼はこの神の存在の証明をも試みている。神の存在証明そのものに関しては、古代ギリシャのプラトンやアリストテレスにもみられる。これはその後アンセルムスによる本体論的証明やその否定としてのトマス・アクィナスらを通じてスコラ哲学において議論されることになったが、これを近代において復活させたのがデカルトである。それに則してライプニッツは、神の形而上学的存在証明を行ったのである¹³⁾(Russell, 1946 = 1970,pp.578)。

ライプニッツは神の完全性を説く。神とは唯一の存在で全ての第一原因であり、完全な善と完全な力能、そして完全な知恵を備えているとされる(Leibniz,1710=1990,pp.23,126)。正義もこの完全性により担保されるのである¹⁴⁾。ライプニッツによれば神は全能であり、全能は神の完全性である。そして神は全知であり、全知は神の完全性である。そしてこの完全な神が創造するのが最善の世界である。この神の完全性は、神によって創造された道徳的秩序および人間からの独立性から正義の原理の根拠ともなる。但し神の完全性は、善や悪などの複数の価値を想定するものであり、多様な価値のバランスの完全性により成り立つとされ、このことから最善の世界が創造される(Rawls,2000,pp.174-175)。このように神はあらゆる可能世界の中で最善なものとして世界を創造するのである(Rawls,2000,pp.181)。

しかし神が創造した最善の世界においても現実には悪が存在している。この点をライプニッツは如何に解釈したのかといえ、神による悪の許容をもってこれに答えている(Leibniz,1710=1990,pp.29)。悪には不完全性としての形而上学的悪と苦痛としての身体的悪、そして罪としての精神的悪の3種があるとされる(Leibniz,1710=1990,pp.138)。これ

らの悪は、全てその起源を被造物である人間に求めることができる（Leibniz,1710=1990,pp.137）。その一方で、神の意志には先行的意志と帰結的意志があるとされる。前者は個々の善を意志するものであるが、後者は人々の全体が最善となることを意志するのである。そこで帰結的意志において、神は悪を許容するのである（酒井,2021,pp.83）。被造物としての人間は、その不完全性ゆえに全ての人は等しく悪なる存在である。但し理性は神からの賜物であることから善である。そこで現実社会にみられる悪とは、理性の誤用によって生じるものであるとされる（Leibniz,1710=1990,pp.201;216）。

ライプニッツの主著『弁神論』では、人間と神の普遍的善の秩序から個人を観る観点が前面に打ち出されている（酒井,2021,pp.94）。これは公共性の観点ともいえる。神の完全性を考慮することで、普遍的な正義を実現できるのは神のみである。そしてこの正義は、神への敬愛による人間の幸福へと繋がることにもなるのである（酒井,2021,pp.126）。

ライプニッツによれば正義は、神の属性であるとされる（酒井,2021,pp.6）。正義は望みや恐れによるものではなく、それ自体が目的である幸福の現実的享受である（酒井,2021,pp.148）。特にライプニッツが正義を慈愛として捉える点に、彼の正義論の特徴を観ることができる¹⁵⁾。ここで慈愛とは、理性的人間にとって実践における普遍的な義務と捉えられている（酒井,2021,pp.2）。その特徴は、それが伝統的なキリスト教における「黄金律」であり、理性に基づいて解明された知恵に依存するものである¹⁶⁾。特に知恵は、モナド論の立場から慈愛の普遍性を示すものである（酒井,2021,pp.3）。正義とは、知恵に一致した慈愛であり、正義論の性格を規定するのは慈愛である（酒井,2021,pp.6）。

慈愛としての正義は、個人的および恣意的なそれではなく、前述の公共の善であり普遍的調和を愛する正義である（酒井,2021,pp.5-6）。人は固有の自然本性をもつがそれは不十分なものである。そこで人は他人の幸福を加えることでより高次の完全性に達することができる。この他者のための善意が善き意志としての正義であり、公共性を帯びた正義である（酒井,2021,pp.6）。前述したように世界は神の創造物である。それ故世界を認識する賢者は、人の幸福、社会の利益、そして神の名誉を求めるのである（酒井,2021,pp.30）。このように正義とは賢者の慈愛であり、知恵に合致した他者への善意を意味するのである（酒井,2021,pp.115）。

ライプニッツの普遍的及び公共的な正義の概念は、神との関係における道徳的側面を有したものであり、これを道徳的正義と呼ぶことができる。これは神により秩序づけられ、現実化されるべき善であり、具体的にそれは先述の人の幸福、社会の利益、神の名誉である（酒井,2021,pp.50）。これは交換的正義や配分的正義とは明らかに異なる¹⁷⁾。交換的正義から配分的正義、そして道徳的正義へと身体的条件および感性的傾向を脱して自然の状態は社会となり、更に神の国となるのである（酒井,2021,pp.22）。

これに呼応しているのがライプニッツの自然法の考え方である。それによると誰をも害するなとする厳格法から各人に各人のものを与えよとする衡平原理、そして正直に生きよ

とする敬虔がそれに対応する¹⁸⁾。これはまたアリストテレスの交換的正義、配分的正義、普遍的正義に対応するものでもある(酒井,2021,pp.115)。

ライプニッツの正義論は、全世界との関係という普遍的立場に立ち、他人の立場という方法と慈愛の原理に依拠し、衡平を重視し、神との関係における敬虔という特徴を有するものである。そしてこれにより普遍的正義が神から担保されるのである(酒井,2021,pp.158)。ライプニッツにとって正義とは、賢者の慈愛であり、理性であり、自然であり、永遠である神性なものを示すものである(酒井,2021,pp.178)。

10. 近代初期の正義論

初期近代の正義論の特徴として、まずは中世とは異なった近代哲学思想の姿勢を挙げることができる。それはデカルトにおいて示されたものであり、無批判的に神を前提とせず、根本からものごとを批判的に考え直すというものである。特にその根底には近代における理性による探究という哲学的姿勢が共通項として存在している。近代西欧合理主義の誕生である。正義を巡る議論もこのような姿勢をその基盤とした。

また近代において個人から成り立つ社会が議論の対象とされ、そこでの社会秩序が問題として認識されるようになった。ここから誕生したのが、社会契約説である。ホッブスは彼の人間観から社会契約説を導き、そこでの正義を示した。正義とは、第3の自然法としての信約の履行を意味する。それは人々の間における平和のための手段と捉えられた。

近代においては、神と人との関係にも変化が生じるようになった。中世的汎神論から脱却して、理神論の立場を明示したのがスピノザである。それは神による予定調和を前提とし、それ故に全ては善であるとされる。ここでは正義は単に外在的なものに過ぎず、人間精神の本性に属するものではないとされる。但し神の命令である正義と愛の実践が社会において法的効力を有することは認めている。この点は近代の初期において、正義が法との関係から議論されていたことが影響したものと思われる。

近代における個人の自律性を実体の概念から想定したのが、ライプニッツのモナド論である。モナド論では、単子間の相互作用はないもののその変化は認められており、その単子の変化は予定調和的であるとされる。特に人はひとつのモナドとして捉えられる。ここにおける正義は、聖書の黄金律である「他者からされたくないことを誰にもしてはならない」と同様の内容とされる。またライプニッツによれば、正義は神への敬愛による人間の幸福としての慈愛と表現されている。これは理性に基づいて解明された知恵に依存するものであり、他者への善意を含む公共的視点を孕んだものといえる。

以上のように初期の近代における正義を巡る議論は、多様性に富んでいるといえる。しかし中世とは異なった人の理性による真理の探究という、新たな近代哲学思想的な姿勢をその基盤とし、個人の自律性をその前提とした社会を想定していることがここでの共通点

として挙げることができる。また個人の自律から社会秩序が問題として認識され、正義はこの秩序問題との関係から議論されることになったのも共通した点である。特に正義が法との関係から議論されるようになったのは、その証のひとつとみることができる。その上で更に正義の特徴としての永久性や無限定性、独立性、第1原因、そして完全性というものが中世との共通点として挙げることができる。

11. おわりに

中世からの解放から近代の初期には様々な哲学思想が開花した。デカルトは疑わしいものは虚偽であるという姿勢から、人間の理性を用いて真理を探究するという近代哲学思想の基盤を示した。

ホッブスは自然の状態を「万人の万人に対する闘争」と見做し、理性が人を自然の状態から国家へと導く源と捉えた。ここにおいて正義とは理性の法則であり、生命の破滅の禁止を意味した。具体的には、第3の自然法としての「信約は履行すべき」ということを示しており、これにより正義が安全を確保するための手段として捉えられることになった。

スピノザは神の存在を啓示によらずに、理性によりそれを説明しようとする理神論の立場をとった。このスピノザにおける正義では、その内容がウルピアヌスと同様でありながらもスコラ哲学とは異なり、正義は外在的なものにすぎず、人間精神の本性に属するものではないとされた。但し、正義と神への愛は社会の権利関係において効力を持つことは認めている。

ライプニッツは彼独自のモナド論を展開したが、これは近代における人々の自律性を示す点でも秀でたものである。彼によれば正義とは、知恵に一致した慈愛であり、他者への善意を含む公共性を帯びたものとされる。ここで慈愛とは、理性的人間にとって実践における普遍的な義務を意味する。またこの正義は、神への敬愛による人間の幸福へと繋がるものでもあるとされる。

このように近代の初期には様々な哲学思想が生まれたが、ここで正義に関して3つの共通点を見出すことができる。第1の共通点として、人の理性による真理の探究という、新たな近代哲学思想をその基盤とし、個人の自律性をその前提とした社会を想定して正義が議論されているということを挙げることができる。近代西欧合理主義の立場である。

第2の共通点は、個人の自律から社会秩序が問題として認識され、正義はこの秩序問題との関係から議論されているということにある。特に正義が法との関係から議論されるようになったのはこの証のひとつである。

第3の共通点は、神との関係による正義の特徴としての永久性や無限定性、独立性、第1原因、そして完全性である。この点は近代の初期に限らず、中世においても同様の特徴を有していたものである。

補注

- 1) この思考問題は『正義の教室：善く生きるための哲学入門』(飲茶,2019,pp.21-32)の「焼きそばパンの転売」の話を下にしたものである。
- 2) 但し、デカルトは神の存在を否定しているわけではない。むしろ「神は在り、あるいは生存し、神は完全に存在者であり、私どもの内なる全てのものは神から来る」(Descartes,1637=1953,pp.52)と述べており、理性も神から与えられたものと捉えている。また神は全ての創造者であり、第1原因であり、精神の内に存する真理の種子と述べている (Descartes,1637=1953,pp.78)。
- 3) 信約とは、人々が互いに何かをすることを取り決め、しかもその行為の実行が将来に置かれる場合を指し、自然法を含めた全ての法の基礎とされる (平石,1989,pp.73)。
- 4) 人間本性の争いの3つの原因として、競争、不信、誇りが挙げられている。
- 5) 第1の自然の法は「各人は、平和を獲得する希望がある限り、それに向かって努力すべきであり、そして、彼がそれを獲得できないときには、彼は戦争のあらゆる援助と利点を、求めかつ利用していい」(Hobbes, 1651=1954,pp.217) であり、第2の自然の法は「人は、平和と自己防衛のために彼が必要と思う限り、他の人々もまたそうである場合には、全てのものに対するこの権利を、進んで捨てるべきであり、他の人々に対しては、彼らが彼自身に対して持つことを彼が許すであろうものと同じ大きさの、自由を持つことで満足すべきである」(Hobbes, 1651=1954,pp.218) である。
- 6) ホブズは「人の態度の理性に対する一致としての人間の正義」と「個々の行為の理性に対する一致としての行為の正義」とを分け (Hobbes, 1651=1954,pp.242)、更に後者を算術的比例や契約者の正義、信約 (売買、賃貸借、為替、物々交換) の履行に関する交換的正义と幾何学的比例や仲裁者の正義、各人のものの配分に関する分配的正义とに分けた (Hobbes, 1651=1954,pp.244-245)。
- 7) これに対して国家では、一般の同意に基づいて各々の所有が決められていることから、正義・不正義が生じる (Spinoza, 1677=1951,pp.61)。
- 8) ライプニッツは全てが予定通りに生じるという予定調和説の立場をとっている (Leibniz,1710=1990,pp.166)。
- 9) この点はキリスト教における魂の不死と呼応している。
- 10) ライプニッツによれば人は君主、臣民、助言者といった3つの種類に分類される。君主はより多くの知性と権力を与えられた人であり、臣民はより少ない知性と権力を与えられた人、そして助言者は権力を持たないが知恵を持ち、君主を補佐する人とされる。但し、人の知性が増すことで権利は上昇することから、臣民と君主には絶対的な境界はないとされる (酒井,2021,pp.163-164)。

- 11) ホッブスにおける君主は個人を想定しているのに対して、ライプニッツは国家機関を想定している (酒井,2021,pp.133)。
- 12) ここで共通とは、人々の間での共通ではなく、神と人との共通という意味である (酒井,2021,pp.114)。それ故、モノダ的共同体とは、神の国を示すことになる (酒井,2021,pp.104)。
- 13) ライプニッツの神の存在証明には4つある。①本体論的証明、宇宙論的証明、永遠の真理よりする証明、予定調和よりする証明がそれである (Russell, 1946 = 1970,pp.578-582)。
- 14) 神の完全性は、賢明さや善良さ、公平さといった道徳的完全性を含み、その存在は実在するだけではなく必然的に実在するものであり、単純であり部分から成り立っているのではなく、全ての被造物から独立しているとされる (Russell, 1946 = 1970,pp.180-181)。
- 15) これに対して、ホッブスは慈愛を偽装された欲望としている (酒井,2021,pp.31)。
- 16) 聖書の黄金律とは、「他者からされたくないことを誰にもしてはならない」とするもので、ライプニッツは個人の行為規範のみならずこれを政治の規範とした (酒井,2021,pp.31)。
- 17) 交換的正義や配分的正義は感情的諸契機が混入することから、普遍性を担保することはできない (酒井,2021,pp.21)。
- 18) ホッブスは厳格法のみを取り上げているとライプニッツは批判する (酒井,2021,pp.115)。

引用文献

- Descartes,1637,*Discours La Methode*,Leyde. (= 1953,落合太郎訳,『方法序説』岩波書店).
- Hobbes,T.,1651,*Leviathan*. (=1954,水田洋訳,『リヴァイアサン (1)』,岩波書店).
- 平石隆敏,1989,「ホッブズー技術としての正義ー」『正義の諸相』寺崎峻輔・塚崎智・塩出彰編,法律文化社.
- 加藤英一,2022,「古代ギリシャの正義論」『横浜商大論集』 Vol.55No.2 : 1-18.
- 加藤英一,2023,「ヘレニズム時代の正義論」『横浜商大論集』 Vol.56No.2 : 27-59.
- 加藤英一,2024a,「古代ローマの正義論」『横浜商大論集』 Vol.57No.2 : 1-30.
- 加藤英一,2024b,「中世の正義論」『横浜商大論集』 Vol.57No.2 : 31-55.
- 河井徳治,1989,「スピノザー法と正義の問題ー」『正義の諸相』寺崎峻輔・塚崎智・塩出彰編,法律文化社.
- Leibniz,g.W.,1710,*Essai de théodicée sur la bonté de Dieu, la liberté de l'homme et l'origine du mal*. (=1990,佐々木能章訳,『ライプニッツ著作集 (6) 宗教哲学 (弁神論)

上』 工作舎) .

大野岳史,2020,「初期近世道德哲学とスピノザの正義概念」『西洋中世の正義論－哲学的意味と現代的意義－』(山口雅広,藤本温編) 晃洋書房.

Rawls,J.,2000,*Lectures on the History of Moral Philosophy*, Havard University Press. (=2005, 坂部恵監訳,『ロールズ 哲学史講義』,みすず書房) .

Russell,B.,1946,*History of Western Philosophy:And its Connection with Political and Social Circumstances from the Earliest Times to the Present Day*,George Allen and Unwin Lid,London. (= 1970,市井三郎訳,『西洋哲学史3』,みすず書房).

Spinoza,B.D.,1677,*Ethica*. (=1951,畠中尚志訳,『エチカー倫理学－(下)』,岩波書店).

酒井,2021,『ライプニッツの正義論』,法政大学出版局.

Yovel, Y.1989,*Spinoza and Other Heretics*,Princeton Univ. Press. (=1998,小岸昭,E. ヨリッセン,細見和之訳,『スピノザ－異端の系譜－』 人文書院).